

○高野新酒屋の「虎と鷲」すこぶ雄大なが、虎の姿が河馬に似て
 いる。○和泉糸店の二十四折以上出来、すみからすみまで自糸
 にて雪景色を現わし、筒はり湯は清麗。○伊東小間物店の富士
 山と竜。○白井煙草会社カ竹に虎。○今休金物店の花
 毎年ながら傑作。○同呉服店の京人形。○武蔵屋物店の梅
 牛引き。○河久糸店の犬と菊花。○今喜乾物店の梅
 新店のイルミネーションは最新。○茶田骨董店は飄筆と駒
 中やカ弁履、見立細工の真髓を得たり。○今泉呉服店(今理)
 の飄筆に駒。○但馬屋ミシン店の浦島太郎。○米屋呉服店
 (丸月)の浦島太郎。○富高薬店の波の引船。○池田の三様
 満点に近し。○大久米乾物店の鯉の滝上り。○戒樓の洋瑠璃
 ○深津写真館の盆栽。○油屋旅館の狸の腹鼓。至極簡單ながら
 面白意匠。○平川青物店の二見浦。○長岡醬油店の慈念と鼓
 盛。○清水魚具店の山羊は装束。○依服屋物店のカキカ山唯一
 のお伽まつて意匠技所共によし。○滝菜子店の涼輪。○今牧唐津
 店の自鳴車 奇抜。○またや履物店の琵琶歌。○丁字屋の文福茶
 釜。○竹田屋乾物店の光秀に蘭丸。○月本平雜貨店の忠茂卿。
 ○保光乾物店の虎と竜、上出来。○泉保洋品店の狐忠信。○洗谷
 金物店の四君子、精巧無比、申し分なし。○今泉洋物店(今式)の
 飛行機。○月本茶店の露七とおみわ。○和泉穀物店の水鷄
 説十段目。○井沢穀物店の神靈矢の渡し等々

宵殿、祭日と二日間にあたり賑った夏祭、まだ電灯
 の充分でなかつたころとて、店一ぱいに広げた「つくり
 もん」も見立細工の照明は、たいてい「アセチレンガス灯
 であつた。大正五六年ころから電灯が行きあたり、百燭
 光をいくつつけたかが店の盛衰をまの語るようになった。
 ほかに娯楽の少ない時代のこととて、在浦の人々が縁族
 知人の家々に祭客として押しかけた。もちろみ祭日二日
 間は商売どまり、若し町外でこそ「スネ商」をする者があ
 つたなら、指弾されるような時代であつた。(終)

研究

日常生活の諸願届 (一)

羽出浦庄産古文書 (高)

禁物会員 安部弥右衛門

本字では、漁村に於ける人々の日常生活の中から出て
 きた、いろ／＼な願届を紹介しよう。このよう願届、届
 日、税収と治安維持のため必要であり、又地願への出
 入、通行及び通行手形を藩から交付して、携帶させる必
 要があり、また交付した手形は、旅行の目的を果し滞村
 した時には、届書と添えて藩庁に返納したものであろう。
 又予定していた期間を過ぎて、村に滞留せぬ者はい
 ては、村役人から其旨を藩庁に報告書を出していたよう
 である。

(第一資料)

仕立出帆御断之事

也下

一 巻 兼 上 枝 帆 積 荷 物 煮 干 賀 友 助 船

但 沖 船 頭 自 身 加 子 居 浦 源 四 郎

同 蒲 江 浦 國 藏 岡 中 越 浦 吉 藏

右之船荷物積立、来山十日出帆仕頼戸内迄罷登申度奉

願候 御慈悲之上ヲ以御往來被為 仰付被下候ハハ難

有仕合可奉存候 依此段御断申上候 以上

進 上 卯二月八日 三 役 人 印

〔第二資料〕

仕立出帆御断之事

地下

一 壳艘 六反帆積荷物 決干加 急干加 沃 土 郎 船

但沖船頭自身、加子尾浦儀乎、同萬太郎

同 才藏

古之船荷物積立束ル廿八日出帆仕、瀬戸内迄罷登公段奉願公、御慈悲之上ヲ以御往來被為、仰舟被下公ハハ難有仕合可奉願公、依此段御断申上公、以上

卯正月廿六日

三 役 人 印

(註) 卯(第二資料共)「卯」日慶応三年七月五日

〔第三資料〕

覚

羽出浦百姓

市 藏 架 藏

古之者当浦音古衛門船 去子年十二月吉田御領喜水津二而難船仕公符換し船預蓋公ニ付此段古之者共乘越公罷越申度奉願公、尤公大江灘庄藏船ニ便船仕束ル廿四日乘船仕度奉願公、依此段御断申上公、以上

五正月廿二日

役 人 印

進 上 古之通御油奉行所に差出申公

(註) 丑日嘉永六年

〔第三資料乙〕

覚

市 藏 架 藏

古之者共寅月二十二日奉願豫州喜水津追罷越公起昨廿一日罷歸公中候、依此段御断申上公、以上

丑二月二十三日

役 人 印

進 上

〔第四資料〕

奉願口上書

羽出浦百姓

喜 兵 衛

古之者共為移御領水浦へ当年中罷越申度奉願公

又 又 治 部 藏

右之者共要用御座公付府内御城下へ罷越申度奉願公

古之者共夫、書面之通奉願公、右願之通被為、仰舟下公以日難有仕合ニ奉願公、依奉願公起如件

安政二卯年四月十二日

役 人 印

進 上

(註一) 兩御領水浦、現今ハ宇月町水浦、當時ハ宇月日阿滿ノ領地デアッタ。

(註二) 府内御城下、今ハ大分市内のこと、昔日大分を府内と称之ていた。

〔第五資料〕

覚

羽出浦

雅 藏 丑 式 拾 九 歳

梅 藏 丑 式 拾 三 歳

喜 平 丑 式 拾 三 歳

梅 郎 丑 式 拾 三 歳

右之者共水夫(小三)罷登中蔵奉存依而此段御断申上依

丑三月廿二日

役 印

進 上

右以御浦奉行宮本嘉治右衛門様御見分二而差出申候

〔第六資料〕

奉願口上書

羽出浦百姓直吉家内

重 太 郎

右之者為被伊豫春蔵船加子二被御座瀬戸内迄罷登申上
度奉願依右願之通被仰付被下依難有仕合可奉存依如件

嘉永六年十一月十日

役 人 中 印

進 上

〔第六資料乙〕

覚

羽出浦百姓直吉家内

重 太 郎

右之者乃先月十日奉願伊豫春蔵船加子以下瀬戸内迄罷越申依此段御断申上依

丑十二月五日

役 人 連 印

進 上

〔第七資料〕

覚

羽出浦百姓

喜 八 郎

右之者共当四月廿二日奉願阿御城下へ罷越依此段御断申上依

同

又 藏

同

久 治 郎

右之者共当四月十二日奉願府外御城下へ罷越依此段御断申上依

昨七日罷歸申上依

印十二月八日

役 人 中 印

進 上

(後安政二年)

〔第八資料〕

覚

但當四月十二日奉願

羽出浦百姓

喜兵衛

但 同 廿二日奉願

實藏

右之者共書面之通奉願明御領本浦へ罷越外延味廿五日
罷歸申外 依此段御断申上外 以上

卯十二月廿六日

進上

役 印

〔第九資料〕

覚

羽出浦百姓

聖喜松

右之者當九月十四日奉願伊豫忠治松加子ニ罷越外
延味夕罷歸申外 不申外

同

松藏

右之者同日奉願堂前平右衛門船加子ニ罷越外延味
夕罷歸申外 不申外

同

相助

右之者同日奉願岡御城下へ罷越外延味夕罷歸申外
依此段御断申上外 以上

卯十二月廿六日

役 印

進上

〔第十資料〕

奉願口上書

羽出浦百姓

友和助

同 友藏

同 八百藏家内 直吉

同 三太郎家内 武吉

同 九兵衛家内 丸平

同 音吉 母

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

右之者共當月九日奉願別府入湯仕外延味廿日罷歸申

進上

役 人 印

〔第十資料 乙〕

覚

羽出浦百姓

同 友和助

同 友藏

同 八百藏家内 直吉

同 三太郎家内 武吉

同 九兵衛家内 丸平

同 音吉 母

同 仁太郎家内 叔

同 仁太郎家内 叔

依而此致御願申上休
庚八月廿一日

進上

役人 印

最後の第十資料について

江戸時代はどうであつたか、明治・大正の頃は、当地

からも別府への入湯行きは盛んであつた。

大正五年までは佐伯からはまだ汽車がなかつた。それ

で多く汽船を利用してゐた。

一部の人は自己所有の船に、家業の外に近所の人も使

用させて別府に往復した。別府では一部の人は船に起居

し、一部の人は街の温泉宿に泊つて、半か月位入湯して

帰るのが通例であつた。

江戸時代にも多く船を利用したものと考へる。陸を往

復するには、佐伯から中ノ谷を越え、野津・大飼・戸水、

大分と、旧道現在の国道十号線沿線を歩かねばならない。

それで強健な人以外には不可能な旅程であつたのに七が

(この項おわり)

セータカアワダチソウ

この間、赤水の奥から芳岳に登つたが、驚いたことに竹越峠へ大

けのこのころの谷間尺、セータカアワダチソウが群生して、黄色の花をつ

ている。人里から五軒まではなれて、しかも峠路は全く草でふさがれてい

る。谷間は、どうしてこの花の種がはこまれてきたのか。

旧藩時代以来、佐伯地方と津久見を結ぶ最短距離、従つて殿塚の

お郡廻りの経路に當つてゐたので、手入の行馬も、往來する人か牛馬の

通行が多かつたという。

今日羊に三度、造林地に通う人か犬を連れられた獵師が通る程度

の峠は、合目ほどまで造林の外、ほとんど人が越さない。

時の勢は何とも致し方なく、そして谷間のセータカアワダチソウで

ある。七か八かを妙な感してある。

(H)

記録

向蘇・菊池・山鹿・久留米地方
の史跡めぐりの記

本会会長 高水嘉吉

九月二十三日と二十四日に、大分県地方史研究会、大分県地理学会、大分探勝アソコウ会共催の、標記の探訪に参加した。古藤田木、岩田正城両会員も参加して佐伯勢も賑わつた。以下探訪の跡を記して、御参考にして供したい。

コースは左図の通り、二十三日は大分→犬飼→竹田→一の宮→大津→菊池→山鹿。二十四日は山鹿→久留米→日田→玖珠→別府→大分であつた。

私達三人は犬飼から乗車した。大分交通の貸切バス二台編成であつたが、私達は一号車の指定の席に納つた。大分

大学の渡辺澄夫、兼子俊一両先生が同行して、説明に當つて下さつたことは有難いことであつた。

犬飼から熊本県境までの国道七、舗装が完了して、バスは快適に初秋の山野を走つた。後度か

が完了して、バスは快適に初秋の山野を走つた。後度か

